

清朝末期莫力達瓦地方における達斡爾族の農業経営状況

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 珠, 栄嘎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002301

清朝末期莫力達瓦地方における達斡爾族の農業経営状況

珠 榮嘎*

1. はじめに

達斡爾族は中華人民共和国における 55 の少数民族の一つである。1982 年に行なわれた人口調査によれば、達斡爾族は 9 万 4 千余の人口を擁し、おもに内モンゴル自治区莫力達瓦達斡爾族自治旗と鄂温克族自治旗および黒竜江省齊々哈爾市の郊外に居住している。とりわけ莫力達瓦自治旗は、達斡爾族総人口の 24% すなわち 22,600 余人の集住しているところである。1956 年の 10 月から 12 月にかけて、筆者は中国全国人民代表大会民族委員会に所属する内蒙古・東北地方少数民族社会歴史調査班の一員として、当時の莫力達瓦旗で達斡爾族の社会歴史状況について調査をおこなった。その報告書はすでに刊行されているが〔内蒙古自治区編輯組編 1985〕、農業経営状況についてのより詳細な内容を以下に報告する。

2. 農業の概要

達斡爾族は農業を営む長い歴史をもつ民族である。彼らの祖先は 17 世紀の中ごろまでに、黒竜江北岸において¹⁾すでに定住して農業に従事していた。

百余年前²⁾の達斡爾人の耕作目的は、食糧と家畜飼料の獲得にあった。したがって、どれほど播種するかはまったく家族の人数（耕作力のない近親を含む）と家畜の頭数によって決定され、平年の生産高で計算して生産する穀物が自給できればよいとされた。当時、達斡爾人は出会う際に「今年の収穫はどうか」と聞くのではなく、「来年使うだけの穀物が取れたか」と聞くのが普通であった。

同治時代（1862～1874）になってから、少数の人が少し余った燕麦を愛琿や海拉爾へ運び、そこにいるロシアの米穀商に売るようになった。穀物販売ができるようになって、耕地面積が直ちに増加することはなかった。なぜなら、当時は毛皮や木材が高価で取引されており、畑を耕して穀物を売却するよりも、狩猟や伐採をして売却す

* 内蒙古社会科学院

¹⁾ 17 世紀 40 年代から達斡爾族はシベリヤに侵出したロシア人の侵略にたえられず、黒竜江を越えて南遷し、嫩江上流地方に定着した。

²⁾ 本稿における「何十年前」等の表現はすべて、現地での実態調査をした 1956 年から起算したものである。

る方が収入がよほど多いからである。

辛亥革命直前までの状況は次のようであった。一般的な状況では、1戸が1個の犁（4頭の牛に引かせる）で耕作するが、2戸協同で1個の犁で耕すこともある。3個ないし4個の犁で耕す家はきわめて稀であった。

3. 農作物

19世紀中ごろまで、達斡爾人の栽培する作物は、燕麦・蕎麦・黍・粟・荏胡麻（えごま）だけであった。そのうち最も多く栽培されたのは燕麦で、達斡爾人の主食の一つであるばかりでなく、馬の主たる飼料でもあった。粟の栽培は最も少なく、当時はもっぱら犬の飼料とし、それを食べる人は非常に少なかった。トウモロコシは野菜畑に少し作り、まだ熟しきらない前に煮て食べるばかりで、それを成熟させて精白して食とすることを知らなかった。20世紀の30年代になってからようやくトウモロコシを作付面積の大きい畑に作るようになった。

その後、漢族農民の遷来と近接地方における穀物市場の出現に伴い、農作物の種類がだんだん多くなってきた。達斡爾人の作る農作物のその達斡爾語名称は次の通りである。

クアレンボ（燕麦）、ハオール（蕎麦）、マンガラム（黍）、ナリム（粟）、ムリゲリ（大麦）、マイルス（小麦）、バーラ（エゴマ）、ソサミ（トウモロコシ）、ブダボルチョ（いんげん豆）、シラボルチョ（大豆）、ククボルチョ（緑豆）、ポクロ（えんどう豆）、ゴーリヤン（こりやん）、マロ（麻）、オロス（イチビ）、タマス（トウゴマ）。

これらのうち、マイルス、ゴーリヤン、タマスなどは漢名の音をそのまま借用しており、また大豆や緑豆については漢名的意識でよばれていることから、漢地から伝来した作物であると思われる。

4. 耕地

清朝末頃から漢族農民が遷来する以前には、達斡爾人が村付近で耕作することはなかった。耕地は近くても村から3～4里離れており、遠いものでは20里離れている。こうした「遠耕」の慣習が形成された原因は、まず第一に牧畜との競合関係にあると思われる。達斡爾人は多かれ少なかれ皆、家畜を飼う。管理上の便宜から家畜を村の周りの草原に放牧するが、もし村の付近に畑を作ると、作物が家畜に荒される。第二に、達斡爾人の村はみな川端にあり、村の付近は川原が多く、理想的な耕地は少ない。達斡爾人に良い耕地と認められる所は、「カブカ」と呼ばれる所と水浸しにならない所

である。「カブカ」というのは、前に川があり、後ろに山がある日当りの良い所をさし、そこに作物を栽培すれば、より早く成熟して収穫量も多いという。そして、水害にあうこともなく、霜害や風害に襲われることも少ない。

民国初年までは、達斡爾人は耕地の計量に次のような単位を採用していた。

①「ハリチ」：原義は箇所という意味であるが、清朝時代にはこれで作付面積を計量していた。例えば、甲が何「ハリチ」の蕎麦を作った、乙は何「ハリチ」の燕麦を作ったというのがごとくである。作付けの際に、達斡爾人は早朝起きて仕事に出かけ、10時近くになって牛が疲れると犁から牛をはずして仕事を切り上げる。つまり、午前中のみ作付け作業をする。土地がよければ、半日のあいだ続けざまに一箇所で播種して、それを1「ハリチ」の畑を作ったと表現する。土地があまり良くない時にはあちらこちらを選んで、半日のあいだに何「ハリチ」もの畑を作ることもある。従って同じ「ハリチ」といっても実際の面積にはかなりの差異がある。また、たとえ一箇所で作った「ハリチ」であったとしても、犁につける牛の力の差がある以上、甲乙二者が半日で作った1「ハリチ」は同じではない。

②「ブニ」：原義は早朝の意味である。上述の半日間で作った畑の面積をまた1「ブニ」ともいう。清朝末に土地が開放されたのち、³⁾ 垧で耕地面積を計量するようになった。しかし達斡爾人は依然として「ブニ」をもちいて1垧を1「ブニ」とみなした。

③「フルグ」：原義は犁の意で、4頭の牛に引かせる1個の犁で播種期間中に作れる耕地を1「フルグ」の耕地という。およそ現在の10垧に相当する。

④「ハルト」：耕地の長さを計量する単位。達斡爾人は秋の収穫時に、作物を刈ってその場で束ね、20束を一箇所に積み上げ、それを「キヤトル」という。そして二つの「キヤトル」の間の距離を「ハルト」という。10「ハルト」といえば、1番目の「キヤトル」から11番目の「キヤトル」までの距離をさす。このように「キヤトル」は20世紀初頭まで耕地を計量する単位であったが、その後徐々に作柄を判断する標準となった。豊作であれば、束とキヤトルの数が多くなる。

⑤「フル」：原義は種の意で、これで耕地の広さを計量する。かつて達斡爾人は「漫撒子(マンサズ)」という方法で種を蒔いた。すなわち播種する人が歩きながら、種を前方の左右にばらまいてゆく。一般に最も左に落ちた種と最も右に落ちた種との間の距離は約4歩あり、これが1「フル」となる。10「フル」の耕地といえ、広さ約40歩の耕地をさすのである。

³⁾ 当時の1垧は10畝で、1畝は650平方メートルにあたる。

⑥「方子」：清朝末から民国初年にかけて土地が開放され、移民開拓が始まってから使用された計量単位で、1方子は45垧である。

清朝末に土地が開放される以前には、土地が個人に所属することはなく、達斡爾人共有のものとして誰でも自由に耕すことができた。役畜（牛）さえあれば、誰でも開墾できるし、どこでどれほど開墾するかの制限はなかった。ただ他人が遊ばせてまだ3年たたない土地を耕す時にのみ、原墾者の同意を得る必要がある。なぜならば、休閑地の土は柔らかく、処女地を開墾するよりも楽で、地味が回復すればまた耕作できるからである。もし原墾者が3年の休閑をへても耕さない場合は、放棄されたと認められて、処女地と同様に誰でも耕作することができる。このことから分かるように、当時、達斡爾人の土地に対する占有は永久性をもたず、その占有権は開墾してから獲得され、休閑地にして3年たったのち喪失するのである。当時の達斡爾族のすむ地域は、土地が広くて人が少ない。概して土地に余裕があった。耕地に恵まれ、土地に関して紛争もなければ、貸借や売買もなかった。

土地私有化は、光緒21（1895）年から宣統時代（1908～1912）に移民開拓が行われてから始まった。土地開放のときに達斡爾人の生計を維持する土地として無料で牧場などの共有の土地と個人所有の土地が残された。これを「生計荒」という。その数は身分に応じて異なる。佐領⁴⁾が90垧、驍騎校⁵⁾が67.5～90垧、領催⁶⁾が45垧、披甲⁷⁾が22.5～45垧、壮丁が10垧という割当である。この時から土地の所有者がうまれた。それでも、共有地や個人所有地のほかにもまだ未開墾地が広がったため、達斡爾人の土地私有観念は依然として薄かった。一部の人々は、未開墾地がいくらでもあるから土地所有許可証をもらってももらわなくても同じだと思い、また一部の人々は、許可証が有料であると思って受け取ろうとしなかった。例えば、エルデツォン一家は40垧の土地を領有すべきであるところ、うち20余垧の土地は家からあまりに遠すぎるといって権利を保持しなかった。

民国初年から漢族の移民が訥莫爾地方に入ってきた。そこで現地の達斡爾人と漢人との間の土地売買がおこなわれ、達斡爾人に残されていた土地が漢族の移民の手に渡ることになった。はじめて土地を売りだした達斡爾人の大半は、儲けるというのではなく、やむなく土地を手放した。聞くところによると、最初に土地を売った村は米勒

4) 清朝の八旗制度によって作られた佐という3百戸からなる軍民合一組織の首領をいう。

5) 佐領の補佐役である。

6) 佐兵士に対する給与を管理する人。

7) 試験を受けて兵士に選ばれた人。

特格爾屯である。そこは人が少なく、土地が多く、耕し切れないから、一部の荒地を漢人に売って、随分と白銀が入ったという。

達斡爾人は次のような状況のもとに土地を売買したと整理される。

- ①土地所有許可証に開墾の期限が記されており、期限になっても開墾しなかった場合、土地所有権が取り消される。当時達斡爾人は「生計荒」をすべて開墾したわけではなく、余った「生計荒」を開墾期限になって無料で取り上げられるよりは売って金を得た方がよいと考えて、売却した。
- ②土地開放の当時、達斡爾人が家ごとに「生計荒」をもらったものの、ある所では土地所有許可証が莫昆（モコン）⁸⁾の代表者や佐領などの上層部の人に保管されたまま受け取らなかった。後になってある莫昆の代表者や佐領が土地所有許可証を占有することによって、共有の未開墾地や他人の「生計荒」を売却して不正に利を得た。
- ③富裕な漢人が来て高利貸しをしたが、その利率は月1割ないし1.5割で、期限は3ヶ月である。一部の達斡爾人は借金を期限通り返金できずに利がつもり、土地を売却して債務を完済するほかなかった。
- ④漢人の遷来に従って、達斡爾人の村落に売店ができ、後払いで酒が売られた。達斡爾人はその酒を買って飲み、秋の収穫後に決算することになるが、予想通りの収穫がなければ土地を売った。

一部の達斡爾人がこうした状況のもとで土地を売却したのち、村落の周りに漢人の作った畑が現れ、村の中に漢人が増えてきた。漢族の農民は庭に垣をめぐらさないために達斡爾人の家畜がその庭や畑に入ってしばしば紛争をひきおこした。もし家畜が作物を荒すと罰金が課せられるか、家畜が没収された。民国初年以後無職の遊民が多くなるに伴い、匪賊が四方に起こり、1931年の「九・一八」事変になると匪賊はますます狂暴をきわめて達斡爾人の家畜や作物を略奪したり、人質を拉致して身代金を要求したりした。そのため訥莫爾川沿岸地方の達斡爾人は、家屋・耕地・生計荒などの不動産を安売りして、莫力達瓦地方に移住してきた。彼らのうちの一部の人は親戚や友人の居住する村に入り、一部の人は主なき荒地を占めて村を作った。親戚や友人の村に定住した場合、ある人は親戚や友人の土地を耕し、ある人は他人の生計荒を買って開墾した。莫力達瓦地方における達斡爾人相互の土地売買は主としてこの時期から始まった。

8) 同一祖先を有する血縁共同体。

5. 農具

春蒔きの農具として、サウル（犁）、アンジャス（犁の刃）、ダムハ（牛を犁につける牛具）、ナルグル（まぐわ）、コト（播種器の一種）などがある。犁の刃は百余年前から使用され始めたが、齊々哈爾市から買い入れられた。

以前は、粟畑の土を1～2回鋤き起こすほかは、燕麦・麦・黍などの畑の中耕をしなかった。土を鋤き起こすチルチンク（鋤）は、使い古したシャベルで作ったもので、今の鋤の形をしているという。それをもちいて土を鋤き起こす動作は、地面を掘る動作とほとんど同じであるという。

農作物を刈り入れる時にハドル（鎌）を使い、刈り取った作物を車で運ぶ。伝えるところによると、達斡爾人はかつて牛の肋骨や木刀を使って取入れをしたが、19世紀の中葉から鎌を使用するようになった。最初の鎌は今のと異なり、細長い鉄片を木の棒の先に挟んで作ったものである。19世紀中葉までは、こしき（車軸受け）にはめる銑鉄がないので、こしきの磨損を弱めるために、結氷期ならこしきの孔に牛糞を塗りつけて他の季節には草をつめた。

脱穀には、ゲリュンク（からざお）、ハチ（フォーク状の木製の農具）、木製のくま手などの道具があり、19世紀末頃になってから石製のローラーを使うようになった。ローラーを使う以前は、からざおを用いていんげん豆や蕎麦の脱穀をおこない、その他の作物なら氷に覆われた地面に広げて家畜に踏ませた。20世紀の始めに遷来した漢人が、石のローラーをはじめ、ひき臼や、すり臼等を作った。

穀物を精白する道具には、ヨルグル（手で回すすり臼）、ルクンク（木製の臼）、オゴル（石臼）、ひき臼、すり臼などがある。木製の臼ルクンクは、黒カンバの切株に穴をあけて作ったもので、穀物をその穴に入れて杵でつくのである。ひき臼とすり臼が使用されるようになってからは、前三者の道具が本来の機能を失った。もはやルクンクは荏胡麻を搗くだけになり、石臼は家畜の水槽になった。

6. 耕作技術

処女地を開墾して畑を作るには、まず場所を選んで秋のうちに火をつけて雑草を焼き払っておいて、翌年の旧暦3月に開墾する。伏天⁹⁾に開墾するものもある。処女地は硬くて骨が折れるので、4頭の牛を犁につけて引かせる。左側につける牛を「ダ・エルゲル」という。ダはリードするという意味で、エルゲルは去勢牛である。右側に

⁹⁾ 夏の最も暑い時期。夏至の第三庚以後の30日間をいう。

つける牛を「フジュール・エルゲル」といい、中間につける2頭の牛を「コシェ・フクル」という。フジュールは端の意で、コシェは中間の意で、フクルは牛である。開墾者は右手で犁を支えて、左手で鞭とダ・エルゲルの手綱を執って牛を進ませる。1つの犁が1垧の土地を開墾するのに、4つの半日（午前中の作業）がかかる。旧暦5月になると、新墾地に種を蒔くが、黍を蒔きつけるのが普通である。

その蒔き方は、まず種を新墾地にばら蒔いて、それから牛にナルグル（まぐわ）を引かせて土地をならす。ナルグルで土地をならすと、種に覆土することになるし、ローラーをかけたことにもなる。これで種蒔きが終わる。耕地に黍や燕麦や蕎麦を蒔きつけるのも、これと同じくまず火をつけて残りの株を焼き払って、それから犁で土をすき起こし、その上に種を蒔いて、最後にナルグルで覆土する。粟を蒔きつけるには二人がいる。一人はコト（播種器）で種を条播し、もう一人は犁で土をすき起こす。これと同時に、犁に引っ張られた木の枝（木の枝をくくりつけて作った箒のようなもの）で覆土してゆく。

開墾された土地に数年間つづけて作物を栽培する。その連作期間の長短は、土地の肥沃の程度によって決められる。一般的な状況のもとでは7～8年である。連作期間において、輪作を行い、同じ作物をつづけざまに栽培することはしない。輪作の順番は耕作習慣と土地条件によって違う。

①以前、魁勒浅屯に住んでいた敖松禄（オソンロ）氏の話によると、1年目に黍を蒔きつける。翌年また黍を蒔きつけるものもある。それから数年間燕麦を作り、ひきつづき小麦と燕麦を1年ずつ作って休耕する。

②以前、宜臥其（イオチ）屯に住んでいた敖来保（オライボ）氏の話では、輪作は黍→蕎麦→粟→燕麦の順番で行う。

③孟福全氏と孟德善氏は以前に尼爾基屯に住んでいたが、2人の話による作付順序は異なる。孟福全氏によれば、まず燕麦を作り、つづいて黍→蕎麦→粟の順番で輪作する。孟德善氏によれば、まず黍を作り（2年連作できる）、2～3年目に小麦、3～4年目に燕麦、4～5年目に蕎麦、5～6年目に粟を作って休耕する。粟を作らずに休耕することもある。

清朝時代に達斡爾人が栽培したのは、みな晩秋作物である。その播種は、4月に粟、5月に燕麦、6月に黍と蕎麦を蒔きつける。粟の生長期は約120日、燕麦は約80日、黍は約70日、蕎麦は約60日である。これらの作物のうち、粟を初霜のあとに収穫するほかは、いずれも霜降り前に収穫する。民国初年から小麦などの早熟作物を作るようになり、これに従って晩秋作物の播種も以前よりは繰り上げられた。

黍・燕麦・蕎麦の畑は、除草や中耕することなく、ただ粟畑で2回除草するだけである。漢族農民が来る前には、粟畑も犁ですき起こすことがなかった。夏の農作業はほとんどなく、春耕秋収をのぞくと時間的余裕があるので、他の生産活動に従事することができる。

旧暦7月末から8月下旬までは収穫期である。裕福な家では、取入れが始まる前に豚を殺して、雇用している農夫たちにご馳走する。刈入れ時には「カルタミ」（ノロの皮で作った上衣、左側の奥身が膝の下まで長い）という一種の作業着を着て、衣服の破損を防ぐ。作物を刈りながら束にする。日が沈む時に、20束ずつを一箇所に穂を上に向けて積み上げ、鳥害や雨水を防ぐためにその上に1束の作物をかぶせる。

旧暦8月下旬から9月中旬までの間に、車で畑にある作物を脱穀場に運ぶ。結氷期になると、脱穀場の地面に水をまいて、うすい氷を張らせる。その上に作物を広げて、家畜に踏ませて脱穀する。粟の脱穀は二人で行う。一人は家畜を駆って回り、一人はハチ（フォーク状の木製農具）で作物を掻き動かす。脱穀した穀類を木製のスコップで空中にまいて風選する。風選された穀類を柳の枝で編んだ倉庫に入れる。倉庫の底は交差しておかれた垂木に支えられているから、穀物が湿って変質することはない。

選種は、風選する時に行う。風上に落ちる粒のふっくりとした穀類をとっておいて翌年の種とする。

かつて達斡爾人は自然災害を神意とみなした。農作物に虫がつくと、鶏を殺して神に供えた。こうすれば神が鶏神を遣わして虫を食ってしまうと思っていた。黍の蒔きつけをする時に、地神を祭るのは、黍に虫がよくつくからだという。以前は虫害を受けることがまれであった。農作物の残り株を焼き払うことと関係していたのかもしれない。雨がなく、干害にあった時は、オボ（天神）を祭って雨乞いをする。オボ祭はとても盛大で、豚や羊を殺して天神に捧げ、またシャマンを招来し、降雨が適量で五穀豊穡になるよう祈らせる。女性はオボ祭に参加できないので、川辺に赴いて野菜畑のために雨乞いをし、家ごとに1羽の鶏を出して水神に供える。それから全身がびしょぬれになるまで水を掛け合う。作柄のよしあしを問わず、毎年7～8月にオボ祭を1回行う。日照りや冠水にみまわれた年には、降雨が適量になるよう祈り、良い作柄であれば天神の恵みに感謝する。

オオカリが作物をあらず時に、畑に竿をたててその先端にブリキの桶を吊しておく。桶が風に吹かれると音を出して、オオカリがそれに脅かされて逃げてしまう。案山子を立てて害鳥を防ぐものもある。

達斡爾人は作付面積の大きい農作物を作るほかに、家ごとに野菜畑を持っている。

野菜畑の周りには柳の枝で編んだ垣を廻して、家畜の侵入を防ぐ。その中に葉たばこ・さやいんげん・馬鈴薯（種は新疆のイリ地方からもってきたという）・白菜・大根などを栽培する。たばこは達斡爾人の生活にとって欠くべからざるものであり、成人なら男女をとわずほとんど皆吸う。来客や訪問等の際には必ずたばこを勧めて尊重の意を表す。

達斡爾人の作ったたばこは、主に自給用であるが、余剰を売るものもいる。彼らの作ったたばこは念入りに加工してあるため、味がとても良く、当所の他民族から非常に歓迎されてきた。

7. 雇用関係と役畜の賃貸し

聞き取りによれば、およそ100年前すなわち19世紀の中葉から、農業における雇用労働が現れた。その原因は、毛皮類と木材などが商品化された結果、農業に従事してきた人も狩猟や伐採をするようになったことにある。狩猟や伐採をするには、家を離れて遠い所に行かなければならず、また一度家を出ると3～4ヶ月かかるので、残された農作業を人に頼む必要がある。当時は主に臨時雇いをしており、賃金は通常穀物で支払われた。犁を支える人が播種期間中2ヶ月働くと、穀物3石¹⁰⁾の代価を受け取る。除草を1日すると、穀物1斗をもらい、秋の収穫時にずっと働くと3～4石の穀物をもらう。穀物を計量して支払うには、斗に穀物を山盛りになるまで入れる。

清朝末頃から民国初期にかけて、役畜の多い富裕な家では、耕地面積を拡大し、約30垧の土地を耕作する家も現れ、従って人を雇用することもより多くなった。耕地が拡大された原因は、雇用が容易になったことにある。かつてオロチョン人とアンダ関係¹¹⁾を作る達斡爾人は官職についている者に限られていたが、清朝末頃になってきて条件さえあれば官吏でなくてもオロチョン人とアンダ関係を作ることができるようになった。これと同時に、達斡爾人相互のアンダ関係を作ったり、エヴェンク人とアンダ関係を作ったりした。これらの達斡爾人が生産手段を提供する雇主として、より多くの労働力を確保しはじめたとともに、彼らへの穀物が必要になったからである。耕地の拡大を促したもう一つの原因は、近所の訥河という町に漢族の商店ができて、

10) 容積の単位。1石は10斗で、1斗は約25キログラムに相当する。

11) アンダの本意は盟友であるが、ここでのアンダは雇用関係をいう。達斡爾人がオロチョン人に食糧・塩・馬・弾薬などの生活手段と生産手段を提供して、相手の捕った獲物を全部取る。達斡爾人相互のアンダでは、出資者と獵人は獲物を半分ずつ取る。

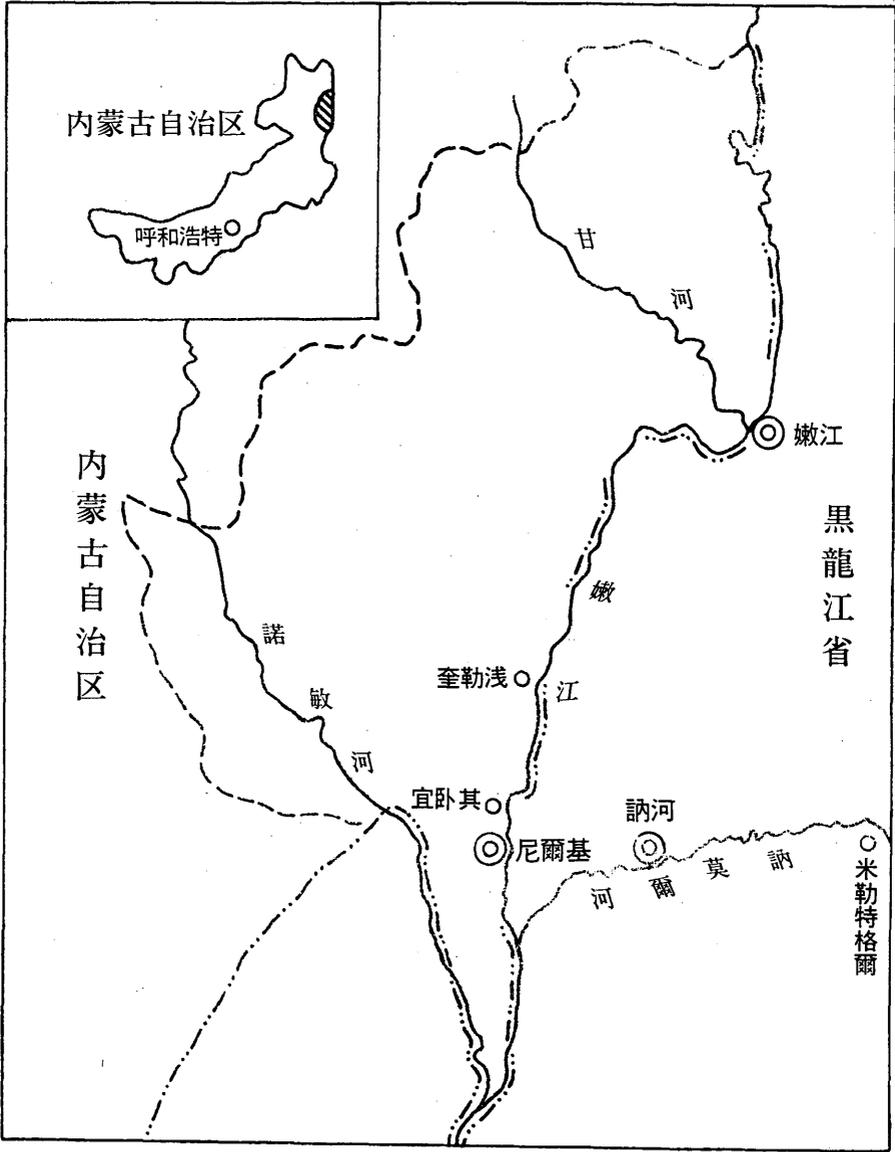
穀物が売却できるようになり、生産手段や生活用品を買い入れるためにも穀物の増産が必要であった。

先述したように耕地は広く自由に耕作できるから、耕作ができるか否かは土地の有無に決定づけられるのではなく、役畜の有無如何にかかっている。50～60年前に役畜のない農家は労働力を畜力と交換することによって耕作していた。労働力を畜力と交換する場合に、一人前の労働者は1口とし、ダ・エルゲルとフジュール・エルゲルはそれぞれ1口とし、2頭のコシェ・フクルは合わせて1口とする。かりに一人の労働者が人力を犁につける4頭の牛の畜力と交換して耕作し、秋に穀物が10石とれたとすれば、2石5斗が労働者の手に入り、残りの7石5斗は役畜の所有者のものとなる。

文 献

内蒙古自治区編輯組編

1985 『達斡爾族社会歴史調査』〈中国少数民族社会歴史調査資料叢刊〉、内蒙古人民出版社。



莫力達瓦達斡爾族自治旗略圖

